

664. 6-C54ㄗ



1200500750083

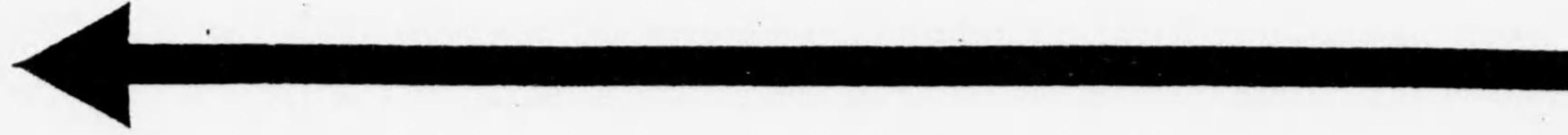


鮮近海に於けるサバ漁場の性状

朝鮮總督府水産試験場編



始



917
120

664.6
C54

朝鮮近海に於けるサバ漁場の性状

朝鮮總督府水産試験場

目次

はしがき……………一

一 サバの種類と形態……………二

二 魚體の大きさ……………四

三 體長の組成……………六

四 回 游……………一〇

五 漁況と海況との關係……………一五

六 現在における漁期、漁場と將來開發の見込……………一八

附 録

- 一、朝鮮におけるサバ漁業發達の沿革
- 二、朝鮮近海で行はれた諸官署のサバ漁業試験調査獎勵事業

發行所 零本



朝鮮近海に於けるサバ漁場の性状

朝鮮に於けるサバ漁業は總督施政以來急速なる發展を遂げ、今やその規模に於いても産額に於いても世界に冠たるの地位に到達した。本場は創設以來本漁業の重要性に鑑み、その漁利の増産、永續に資するため、科學的方法により實地の調査を行つて漁場の性状に關する基礎的事項の闡明に努めた。

調査の方法は朝鮮沿海、即ち日本海西半部、對馬海峽、黄海東半部の廣汎なる海域の所々に於いて延繩、流網を試用して漁獲の多寡を知り、同時にその場所に於ける氣象、海況を觀測し、その漁獲物に就き魚體の大きさ、食餌、生殖線の状態を觀察し、稚魚、鱒を採集し、また別に標識魚の放流、再捕を行ひ、これを資料として種々の



考察を加へた。この調査は前後約二十年間に亙つて行はれたものであるが、この間臨海各道水産試験場の協力により資料を提供せられたことも尠くない。特に昭和十一年より昭和十四年までの間は東海岸各道—咸北、咸南、江原、慶北、慶南—水産試験場と緊密なる作業上の連絡を保つて事業の進行に努めたことは、この方面の状態を明らかならしむるため極めて効果的のものであつた。

かくして今日に到つたのであるが、もとよりその對稱とするところは茫洋たる大海中の事に屬し、その全貌を闡明することは一朝一夕の業にあらざるも、吾人は最近までの経過により近海に於けるサバの生活、回游竝に漁況と海況との關係等に就き稍々知見を進め、新漁場の探査に關しても得るところがあつた。よつて此處にその概要を収録して水産業界の参考に供する次第である。これにより幾分たりともサバ漁場に關する基礎的智識の開明に資する所あらば幸である。

一、サバの種類と形態

917
120

朝鮮近海に棲息するサバには俗にホンサバ又はヒラサバ—*Scomber japonicus* (HOUTTUYN)—と稱せられるものと、ゴマサバ又はマルサバ—*Scomber tapainocephalus* (BLEEKER)—と稱せられるものとの二種類がある。この内、産額の大部分を占め全沿海に分布するものはホンサバである。ゴマサバは南部對馬海峽から濟州島方面に於ける沖合の暖流域に少量のものが漁獲されるに過ぎない。よつて以下本文では朝鮮に於ける漁業の對稱として重要なホンサバ(以下單にサバと略稱)に就いてのみ述べる事としよう。

このホンサバの形態は第一背鰭九—一〇棘、第二背鰭一棘、十一軟條と五副鰭、臀鰭一離棘と一棘十一軟條及び五副鰭、體長⁽¹⁾と全長⁽²⁾との割合は〇・八五、頸周⁽³⁾と體長との割合は〇・五〇、脊椎骨數は三一個である。體の背部は綠色で屈曲せる黑色波狀の流紋は側線下にまで延びてゐる。腹方は銀白色で普通斑點はない。雌雄個體數の割合は、雌は雄よりも多く六對四位のものである。

第一圖



- (1) 體長—下顎先端より尾鰭付根までの距離
- (2) 全長—下顎先端より尾鰭末端までの距離
- (3) 頸周—鰓孔最上部の位置に於ける體周

二、魚體の大きさ

朝鮮近海で漁獲されるサバは一般に大型で經濟價値に富んでゐる。昭和五年乃至十二年の間、全沿海に於ける本調査の漁獲物に就いて、多數の魚體の大きさ(體長、體重)

(第一表) サバ體長、體重平均値

海域	東海岸地方			西海岸地方		
	體長	體重	測定尾數	體長	體重	測定尾數
北部	三六・八糎	七七四瓦	二・二三一	三八・四糎	九一七瓦	五〇四
中部	三三・七	六〇九	四・〇八一	三七・七	八六六	一・三四五
南部	三三・一	五七七	五・四五四	三七・四	八二二	三六八
西部	—	—	—	三九・九	九三八	六六六
全域	三四・〇糎	六二六瓦	一一・七六六	三八・三糎	八八六瓦	二・八八一

を測定した所、その全平均は三四・八糶、六七六瓦であつた。然しながら更にこれを細分して地方別の平均を見れば、西海岸地方のものは、東海岸地方のものよりも大きく、また東西兩海岸共南部のものよりも北部の地方に至るに従つて大となつてゐる。第一表は第一圖の地方別區劃に基づいて求めた平均値を示すものである。

三、體長の組成

各地方別の平均體長は前節の通り所によつてその値を異にしてゐるが、これは大、小種々の大きさのものゝ混合する割合、即ち體長組成の千分率分布の状態を異にするからである。第二圖は本調査の結果により求めた朝鮮沿海のサバ體長の千分率分布曲線であるが、これにより各地方に於ける體長組成の状態を検討してみることにしよう。

圖中其の一は西海岸方面の状態をあらはし其の二は東海岸方面の状態を示してゐる。これによれば西海岸地方にありては曲線は一つの頂點を有する略々對稱形の山形をなし、體長の組成は一定の大きさの魚を中心とした一群のものと思ふを得るが、東海岸

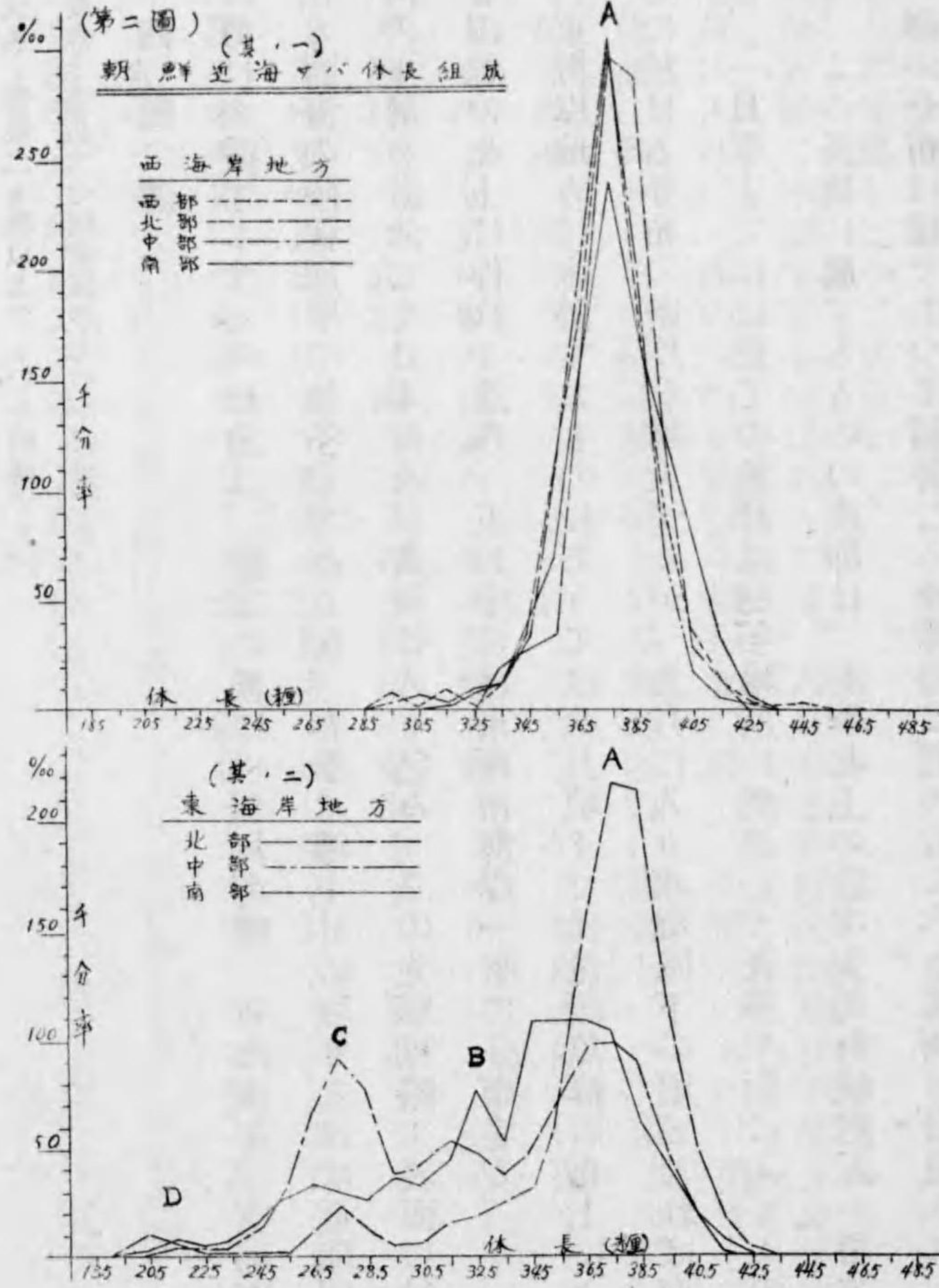
地方にありては曲線は幾つかの頂點を有する山形をなし、體長の組成は大、中、小、數種の大きさのものを中心とした數群から成るものと見做される。圖中(其の一、其の二)各曲線の頂點にA・B・C・Dなる符號を附し、各體長群を「A群」「B群」「C群」「D群」と呼稱することとすれば、A群は體長三七・五糶内外の大型成魚⁽⁴⁾、B群は體長三二・五糶内外の中型成魚、C群は體長二七・五糶内外の小型成魚乃至は大型幼魚⁽⁵⁾、D群は體長二一・五糶内外の中型幼魚である。今これ等四群の多寡により體長組成の特徴を概観すれば次の通りである。

(一) A群は東海岸にありても、西海岸にありても固體數の割合の大部を占め、朝鮮に於けるサバの漁獲の主なる對稱となつてゐる。

故にその個體數の消長は當年に於ける漁況の豊凶に重大なる關係を有する。

(二) 東海岸地方の各海域(北部・中部・南部共)にはA群の外B群、C群、D群が來游する。別に行つた年別比較の結果によれば、A群は毎年個體數の最大なる割合

第二圖



を占めてゐるが、B、C、Dの三群はこれに比し個體數の割合遙かに少なく、然も年によりその變化が大きいやうである。なほこれら三群の中、B群、C群はA群に次いで多くの個體數の割合を有するやうであるが、D群の個體數の割合は最も少ない。B、C、D三群の個體數の消長は當年のみならず後年に於ける漁況の豊凶に關係を有するものと見做される。

(三)西海岸地方にありては各海域共(西部・北部・中部・南部)その個體數の大部分を占むるものは、A群である。B群は微かにその存在を示すに過ぎず、C群、D群は全く現はれてゐない。即ち大體に於いてA群を中心とする一群のものを見做し得られる。

(四)東西兩海岸とも南部より北部(及び西部)の海域に進むにつれてA群の個體數の割合が増してゐる傾向がある。平均體長、體重が北部の海域に到るに伴つて大なる値を有するはこれが爲である。

(4) 成魚—體長二七糎以上のものを假稱する。

(5) 幼魚—體長二七糎未滿のものを假稱する。

四、回游

朝鮮近海に來游するサバの成魚は、嚴寒の候には對馬海峽、黃海南部、支那東海北部に於ける暖海の陸棚底層で越冬してゐるが、春季水溫上昇の頃となれば近陸回游を起し、海の上層を游泳して日本海及び黃海に入り込み、その先驅は略々表面に於ける一〇度等溫線の北上に伴れて進み、五月中には東西兩海岸一帯に分布する。

この内東海岸地方に來游するものにおいて八月頃までは後續魚群の北上により、この地方に於ける分布の密度を増大するが、九月に入り水溫降下の頃となれば南下回游を起し、一月頃までには總ての魚群は越冬場所に到達して底層生活に入るものと認められる。この系統に屬するものの産卵は、春季北上の途次對馬海峽附近一帯で行はれるが、卵の分布は粗であつて顯著なる産卵場と認めらるべき場所は發見されない。

攝餌は春季から初冬までの日本海回游の期間中旺盛であるが、冬季底層生活中にあるものは殆んど食餌をとつて居ない。

次に黃海方面に來游するものにおいて、六月末までは後續魚群の北上を推定されるが、七月に入れば一部のものを黃海中部以北に残し、大部分のものは南下して南鮮多島海の西部に到り、その後晩秋の頃まで多島海附近に滞留し、一月頃までには更に南下して越冬場所に到達するものと思はれる。然しながら初夏多島海に南下したものの一部は、それより更に東方に進み、對馬海峽を経て日本海への入り込みをなし、春季東海岸方面に向つた魚群を追ひ、これと同様の經路をとつて回游するものもあるやうである。なほ夏季以後に於いて黃海中部以北方面に残されたサバは長山列島、大靑群島等の島々の地先に小集團をなして生活し、晩秋まで滞留したる後、南下して越冬場所に向ふものと考へられる。黃海方面に來游するサバも春季北上の途次産卵し、攝餌は春季から秋季まで旺んである。この産卵は五・六月中黃海の略々全面に互つて粗に

行はれるやうであるが、關東半島の南部—海洋島の東方近海—に於ける産卵は特に旺盛であつて、この部分は顯著なる産卵場所と認められる。

東西兩海岸を通じサバの食餌の種類を見るに小型の甲殻類—Euphausiidae, Amphipoda, Copepoda—を主なるものとし各種の小魚、稚魚、小イカ等をも攝つてゐる場合がある。第三圖は前記の事柄を表はしたものであるが、これにより更に回游の経路を明らかに了解せらるゝであらう。この中對馬海峽及び日本海方面に於ける回游は永年に互る標識魚放流、再捕による魚の移動の事實に基づいて考察したものであるが、黄海方面に於ける回游経路は各種の漁具を試用して、その漁獲の時期、場所、水深等によつて魚の移動を推定したものである。

朝鮮近海に於けるサバの産卵は前記の通り朝鮮海峽附近から黄海方面に互つて行はれ、その時期は四月乃至六月である。この中、南部の産卵は早く行はれ、北部の産卵は遅れて行はれる。孵化發生した稚魚は初期には浮游生活を營んでゐるが、恐らく發

生當年の冬季までには幼魚となり、對馬海峽乃至は支那東海方面の暖海に南下するものであらう。

サバの成長度は未だ確實にされてゐないため、年齢別の回游状態を知ることが出来ない。然しながら推定年齢と第二圖の體長組成の百分率分布の地方別とを前記の回游経路に對照して幼魚期以後に於けるサバの生涯の回游状態の一般的傾向を考察すれば次の通りである。

即ちこれによれば恐らくは生後滿一ケ年の幼魚は春季成魚と共に東海岸地方に北上して、秋季には南下し、滿二ケ年目以後にありては成魚となつて第三圖に示す回游を行ふものであらう。而して東海岸方面には各種の年級のものゝ回游するが、西海岸方面には主として老年魚が回游するものであらう。これは東海岸方面の體長の組成は「A」「B」「C」「D」の四群から成り立ち、西海岸方面の體長は主として「A群」から成り立つてゐることにより推定される。また南北移動の距離は東西兩海岸共に年齢

の増加と共に増大するもののやうである。これは北部の地方に進むにつれて魚體の大型なるもの多きことにより推定されるのである。

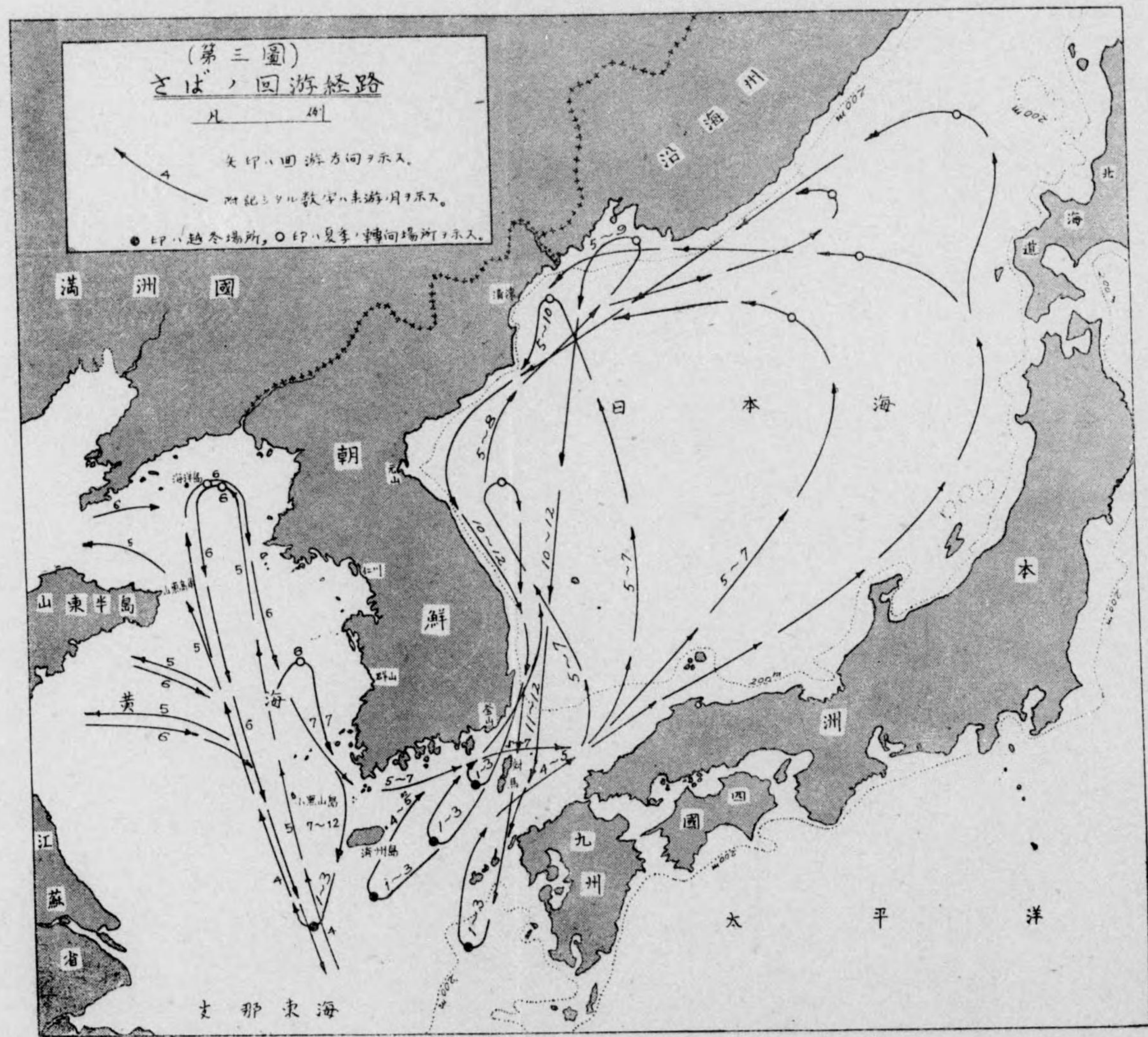
五、漁況と海況との關係

サバの漁況が海況に支配されることは多くの事實から見て間違ひなきところであらう。その直接的な原因としては(一)サバの棲息水域に於ける廣範圍に亙る水溫分布状態の適否、(二)漁場に於ける現場水溫の適否、(三)食餌分布状態の適否等漁獲當時に於いて魚群を或る場所に密集せしめ又は離散せしむるかの條件に係るものであり、間接的な原因としては漁獲當時に生存するサバの發生以來、何ヶ年間かの(一)海況の如何による年々の稚魚の發生の良否(二)餌料生産量の多寡による年々のサバの成育の良否等、サバの繁殖に關するものであるが、これら直接間接の原因は錯雜に重なり合つて所謂漁況の豫察なるものは容易に的確になし得るものではない。こゝには單に本調査に於ける延縄及び流網による漁獲試験の結果を統計的に考察して操業現場に於ける

五、漁況と海況との關係

サバの漁況が海況に支配されることは多くの事實から見て間違ひなきところであらう。その直接的な原因としては(一)サバの棲息水域に於ける廣範圍に亙る水温分布状態の適否、(二)漁場に於ける現場水温の適否、(三)食餌分布状態の適否等漁獲當時に於いて魚群を或る場所に密集せしめ又は離散せしむるかの條件に係るものであり、間接的な原因としては漁獲當時に生存するサバの發生以來、何ヶ年間かの(一)海況の如何による年々の稚魚の發生の良否(二)餌料生産量の多寡による年々のサバの成育の良否等、サバの繁殖に關するものであるが、これら直接間接の原因は錯雜に重なり合つて所謂漁況の豫察なるものは容易に的確になし得るものではない。こゝには單に本調査に於ける延縄及び流網による漁獲試験の結果を統計的に考察して操業現場に於ける

第三圖



水溫、水色、透明度、月齡と漁獲量との間に比較的顯著なる關係を認められたる場合のみに就いて述べることにしよう。

(二) 東海岸地方に於ける延繩の漁獲量と海況との關係

第四圖(A)(B)(C)は昭和十年から昭和十二年までの三年間東海岸地方に於いて四季に亙り五〇八回の延繩作業⁽⁴⁾を試み、その結果により求めた漁獲率―毎作業に於ける釣鈎一〇〇〇本に對するサバの漁獲尾數の割合―と海況との關係をあらはしたものである。以下圖に就いて説明を進める。

〔水溫〕 第四圖(A)は漁獲層水溫―漁具投下水深に於ける水溫―と漁獲率との關係をあらはしたものである。これによれば曲線は略々對稱形の山形をなし一定水溫に於いて漁獲率が最大となつてゐる事を知られる。計算の結果漁獲率最大なる場合の平均水溫は一六・二度であつて、漁獲率比較的大なる場合の水溫の範圍は一・六度―二〇・八度である。故に漁獲最適溫は一六・二度、漁獲適溫の範圍は

一一・六度—二〇・八度と見做し得られる。

〔透明度〕 第四圖(B)は透明度と漁獲率との関係をあらはしたものである。この関係は直線を以つてあらはされ、透明度の増加と共に漁獲率の増加する傾向を示してゐる。而して漁獲率の値がその全平均(六七)以上にある場合に於いては、透明度は一八米以上となつてゐるから、大漁は透明度一八米以上の場合に多く生起するものと思はれる。

〔月齡〕 第四圖(C)は、月齡と日別の毎作業平均漁獲率との関係をあらはしたものである。これによれば日別の毎作業平均漁獲率は月齡二二日—六日の期間は漁獲率の全平均(八五)以上の値を示し、月齡七日—二一日の期間はそれ以下の値を示してゐる。即ち月明の期間は漁獲少なく、闇の期間に漁獲多き傾向をあらはしてゐる。但しサバ延繩は晝間操業するものであるから、この関係は間接的なものであつて、月の明暗による光の強弱が直接漁獲量に影響を及ぼすものと解すべ

きではない。

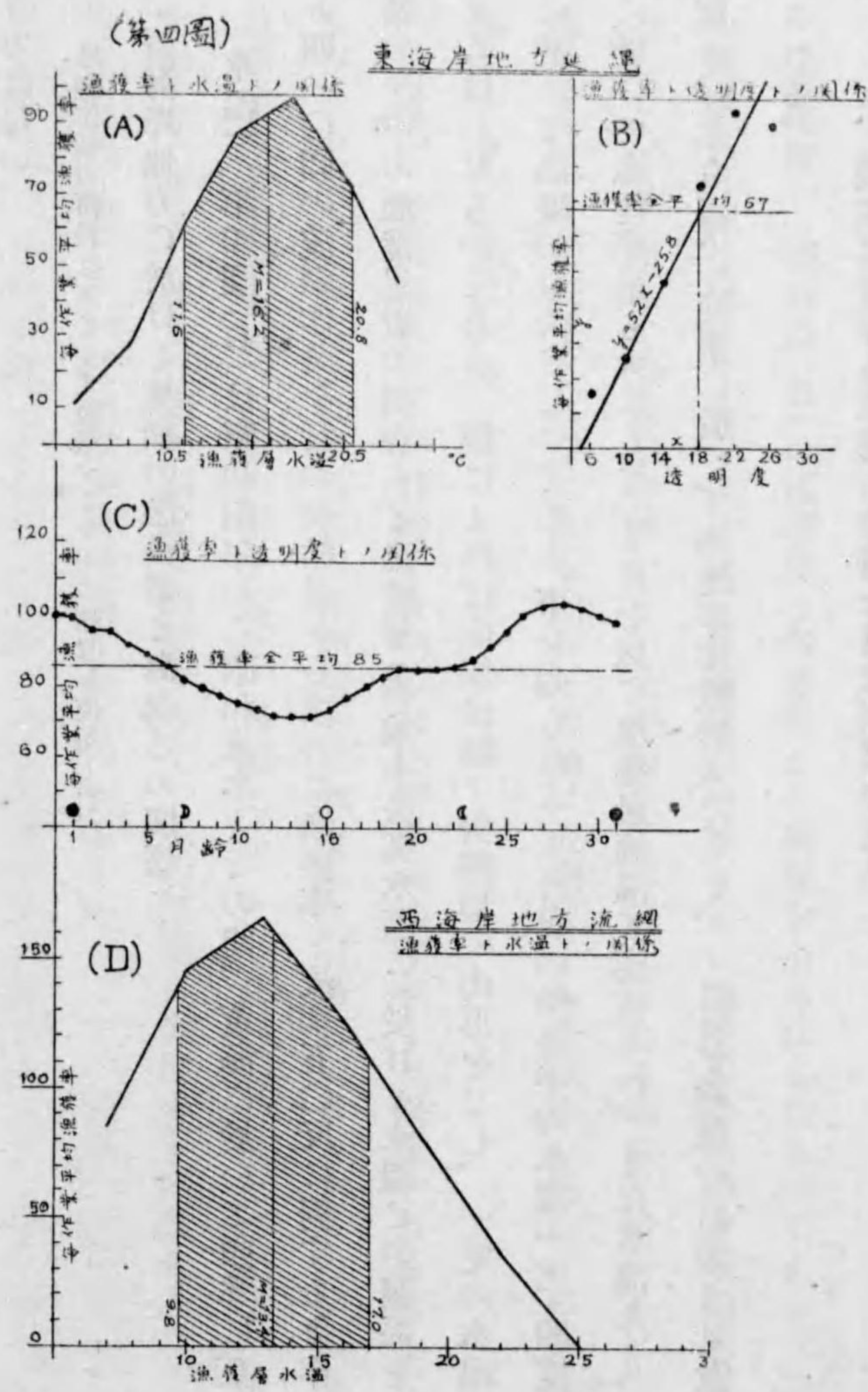
(6) 延繩作業の餌料は主として鹽藏マイワシの切身を使用した。

(二) 西海岸地方に於ける流網の漁獲率と海況との關係

〔水溫〕 第四圖(D)は昭和四年から昭和九年までの間、黄海に於いて四季に互り四一〇回の流網作業を行つた結果から求めた漁獲率—流網五〇反に對する毎作業のサバの漁獲尾數の割合—と漁獲層(網地中央部水深)に於ける水溫との関係をあらはしたものである。圖によれば曲線は略々對稱形の山形をなし、一定の水溫に於いて漁獲が最大となつてゐる事を知られる。計算の結果平均水溫一三・四度に於いて漁獲率最も大にして、これを以て漁獲最適水溫と認められ、また水溫九・八度—一七・〇度の範圍に於いて漁獲率比較的大にして、これを適水溫の範圍と見做される。

六、現在に於ける漁期、漁場と將來開發の見込

第四圖



朝鮮沿海でサバの漁獲を目的としてゐる漁業には種々のものがあるが、この内漁業の規模も大きく、且つ多量の漁獲をなし得るものとしては機船巾着網漁業、機船流網漁業及び機船又は帆船で操業する延縄漁業である。定置漁具及び一本釣でもサバは漁獲されてゐるが、これらの漁業による漁獲高は全體的に見れば極く少く少量のものである。よつてこゝにはこれら三種の主要漁業に就き漁期、漁場の現状を述べ且つ本調査の結果判明したところにより將來新たに開發し得る見込みある漁場の状態に就いて説くことゝしよう。先づその概要を説き、然る後漁業の種類別に詳説する。

現在機船巾着網、機船流網漁業は大體同一の區域を漁場とし、東海岸中部から多島海を経て西海岸中部に至る延長約六百哩に亙る沿海で操業されてゐる。その漁獲物はサバを主とする外マアチも相當の量に達する。而してこの内主としてサバの漁獲多き部分は多島海中部以東、東海岸方面であつて、マアチの漁獲を主とする部分は多島海中部以西、西海岸方面である。

かくの如くこれらの漁業はサバの外マアチの漁獲をも行ふものであるから、その現状と將來を論ずるに當つてはマアチの漁場にも言及せざるを得ない。この二つの漁業は何れも創始以來凡そ三十年の歳月を経過しサバに關する限り朝鮮沿海の漁場は開き盡されて、差し當り有望なる新漁場と認めらるべきものは多く残されてゐない。然しながら本場調査の結果によれば西海岸方面に來游するマアチ及黃海北部に來游するサバは流網の漁獲に適し、然もこの地方の漁場は未開の部分が尠くないから流網漁業にありては今後西海岸方面に多大の發展をなし得べきものと信せられる。

延繩漁業は昭和年代に入つて勃興した新漁業であつて現在東海岸一帯で行はれてゐるが、本調査の結果現在に於ける漁場の東方沖合には廣大なる未開の漁場が横はつて居ることが知られたから、延繩漁業は今後この方面に多大の發展を期待される。多島海西半部及黃海方面に來游するサバは調査の結果延繩の釣獲に適せぬから延繩漁業は此の方面への發展は今後望みなきものと思はれる。第五圖(1)乃至(12)は、これら三種

の業種別漁場の現状(昭和十五年)と、吾人の調査により發見されたサバの新漁場(マアチ漁場も附記した)とを月別にあらはしたものである。以下この圖によつて詳説する。

(一) 機船巾着網漁場

現在この漁場で機船巾着網漁業に従事するものの網數は八五統であるが、この内七九統は兩手廻し漁法に依り、他の八統は片手廻し漁法に依つてゐる。本漁業の總漁獲高(尾數)の三分の二はサバであるが、残りの三分の一はマアチである。従つて漁業經濟上マアチも亦重視されてゐる。サバは普通晝間操業により漁獲されるが、多くの場合マアチが混獲される。而してマアチを目的として操業する場合は所謂「夜焚き」と稱する漁法により、夜間岩礁地帯に到り集漁燈を使用して魚群を誘引し、これに投網して旋き捕るか、または夜間魚群の發する「夜光」を見て投網して旋き捕るのである。前者は多島海の各地で行はれてゐるが、後者は西海岸南部の蝟島、鞍馬島方面のみで行はれる漁法である。

本漁業は漁法の性質上、魚群の出現する場所に漁船が集中して操業すること多く、漁獲の競争が激烈であるため、同業者はこれを避け、且つ其の他種々の経済上の共同の利益を増進するため、朝鮮鯖巾着網漁業水産組合を設立してこれに加入してゐる。

昭和の初期にありては本漁業は、三月末済州島南岸のサバ漁より始められ、六月よりは多島海中部以東に於けるサバ、アヂ漁に移り、晩秋の頃より東海岸南部沿海のサバ漁に従事し、翌年一月に入つて漁期を終つたものであるが、近年にありては春季済州島方面の操業は概して成績不良なるため、組合員の申合せによりこれを中止し、六月中、多島海方面の操業より開始する事となつた。即ち従前に比し漁期は短縮せられ、経済上有利なりと認めらるゝ部分に於いてのみ操業することとなつてゐるのである。

第五圖の中青色の右下り斜線を施した区域は主としてサバの漁獲される漁場、青色左下りの斜線を施した区域は主としてマアヂの漁獲される漁場、青色點線を以て圍ま

れた区域は前記組合の申合せにより休漁中のサバ漁場を示すものである。今圖に就いて漁場の月別状態を見るに休業中のサバ漁場は三月末より五月までの間、済州島南東岸乃至青山島附近にあつて、月々北方に移動擴張してゐることが知られる。近年に於ける操業は六月に入り青山島近海から巨濟島近海までの區域で開始される。七月に入れば漁場は西方に擴張し、一部の漁船は楸子島以西、黒山諸島乃至は蝟島方面の操業に向ふものがある。六、七、八月中、この多島海漁場の漁獲物はサバ及びアヂであるが、この中、東半部にありてはサバ、アヂの漁獲量は略々伯仲の間にあるが、西するに連れてマアヂ多き状態となつてゐる。而して青山島以東では一般に晝間操業が行はれてゐるが、黒山諸島以西に於いてはマアヂを目的とする夜間操業が行はれてゐる。(黒山諸島では「夜焚き」が行はれ、蝟島方面では魚群の發する夜光を見て投網する方法が行はれてゐる)。九月、十月は巨濟島近海で操業されるが、その漁獲はサバよりもマアヂが多く従つて「夜焚き」が盛に行はれる。十一月に入れば江原道北部水源端

附近のサバ漁が開始される。この漁場はそれより漸次南下して十二月には竹邊附近より蔚崎附近までの沿岸部で操業される。これを以つて朝鮮沿海に於ける全漁期を終るのであるが、一部の漁船は一月に入り對馬沿海でサバ漁に従事するものがある。現在に於ける漁期、漁場は上記の通りであるが、朝鮮沿海には差し當り有望確實と認められる巾着網の新漁場は見當らない。ただ西海岸北部大青群島及椒島附近には夏季から秋季までの間、アヂ、サバ魚群の出現することがあり、關東州南岸海洋島附近には初夏より晩秋までの間サバ群の出現する事が多いから今後實地の操業を試みて漁場としての價値⁽⁷⁾を確かむる必要があるであらう。

(7) 海洋島附近のサバ群棲場所では關東州水産試験場は明治四十四年から大正二年までの間巾着網漁業試験を行ひ、また林兼商店、その他の巾着網漁船も昭和の初期實地の操業を試みたことがある。然し何れも十分な成績を擧げてゐない。

(二) サバ流網漁場。

サバ流網漁業に従事する機船の数は現在一二〇隻内外である。本漁業は大正年代には東海岸南部に於けるサバの漁獲に重點を置いて營まれたものであるが、昭和の初期に至り、この漁場は荒廢し、代つて西海岸南部地方にアヂ漁場が發見せられたるため、近年にありてはこれに主力を注ぎ、東海岸方面に於けるサバの漁獲は西岸アヂ漁の閑漁期に行はるゝに過ぎないものとなつた。その年間に於ける總漁獲尾數の割合はアヂ五、サバ一位である。圖中右下りの赤色斜線を施した區域はサバの漁獲を主とする漁場、左下りの赤色斜線の區域はサバの漁獲少くしてマアヂの漁獲を主とする漁場、赤色點線（左下りはサバ、右下りはマアヂの漁獲を主とする）を以つてあらはしたものは調査の結果發見された新漁場であつて未利用の區域、赤色斜線に黒點を散布した部分は中華民國漁船の出漁する漁場の區域をあらはしたものである。

圖によつて漁場の月別状態を説明するに、本漁業は現在晩春より中秋までは西海岸南半部及多島海西部に於けるアヂ漁に従事し、晩秋より初春までは東海岸南半部及對

馬海峽西水道方面に於けるサバ漁に従事する。而してアヂ漁は五月末西海岸南部蛸島、鞍馬島西沖の漁場で開始せられ、六月に入れば盛漁期となつて、その區域は北方於青島方面まで擴張し、七月に入れば漁場は縮少して南方に移り、それより十月までの間大黒山群島近海を中心として楸子島、巨文島方面まで操業される。この漁場に於ける漁獲物はマアヂを主とし、サバの漁獲は總漁獲尾數の一割にも達せざる程度である。十月に入れば東海岸のサバ漁期に入り、漁船は漸次この方面に移動して操業を開始する。この月中は江原道水源端附近で操業されるが、漁場はそれより月々南下して、十一月には江原道北部より中部までの沿海、十二月には江原道中部沿海より對馬海峽西水道までの間、一月より四月までの間は對馬海峽西水道附近で操業される。

以上各漁期、漁場に於ける漁具投下水深は經驗上略々最適の深さが定められてゐるが、西海岸南部地方に於けるマアヂ漁にありては、初漁期は淺く夏季より秋季に至るに伴つて深さを増し、また東海岸方面のサバ漁にありても秋季江原道方面の操業に當

つては比較的淺いが、冬季から初春までの對馬海峽西水道方面の操業にありては深さを増し、網裾を陸棚海底に達せしめてゐる。今各地方の各期節別投網水深（浮標繩の長さ）を掲ぐれば次の通りである。

漁期	漁場	主なる漁獲物	浮標繩長さ
自五月下旬 至六月上旬	格列飛列島—大黒山群島	マアヂ	三米—五米
自六月中旬 至七月中旬	同	同	三米—七米
自七月上旬 至七月下旬	大黒山群島附近	同	三米—二一米
八月中	同	同	一三米—一五米
九月中	同	同	一〇米—二五米
十月中	同	同	一五米—二八米
十一月	江原道北部沿岸	サバ	一〇米—三〇米
十一月	江原道中部沿岸	同	一〇米—三〇米
十二月	自江原道南部 至慶尙南道北部沿岸	同	一〇米—三〇米
自十二月 至四月	對馬海峽西水道及附近	同	一〇〇米—二二〇米

マアチの漁獲に適當する流網新漁場は、昭和四年以來本場の調査によつて西海岸から多島海西部に至る沿海の所に連続するものが發見された。その總面積は一五、四五六平方哩に互る廣大なるものであつて、漁期は五月末から十一月に至るものである。前記現在の、この地方に於けるアチ漁場は昭和九年に於ける本場の實地指導を契機としてその價值を紹介せられ朝鮮在住流網漁業により開發されたものであつて以來年々産額を増し、現在に於いては年額凡そ百萬圓に達してゐる。然しながらこの新漁場の北半部は從來に於ける經濟上の理由により未開のまゝなつてゐるが、今後の開發により滿州、北支に對する鮮魚の給源として東亞の共榮に貢獻し得べきを期待される。

サバの漁獲に適する流網漁場としては山東半島芝罘沿岸及關東州海洋島附近に散在する漁場がある。その總面積は一〇八四平方哩のものであつて漁期は五、六月中である。この漁場は古來中華民國山東省在住流網漁業者の操業する漁場であるが、未だ邦人漁業者は進出するに到つてない。今後なほ開發の餘地ありと認めらるゝものである。

(三) 延繩漁場

本漁業は四月から十二月までの間、對馬海峽以北の東海岸一帯で行はれてゐる。従業船數は昭和十年頃より急激に増加し、昭和十四年には帆船一、〇三九隻、發動機船一八九隻、合計一、二二八隻となつた。圖中黑色の斜線を施した區域は、昭和十四年度中、一般漁船によつて操業された漁場、黑色細點を散布した區域は本調査の結果發見された新漁場を示すものである。これに依れば、漁場は春季から夏季までの間は、對馬海峽方面より朝鮮東岸北部に向つて擴大しつゝ、その區域を移動し、秋季には最北に達して咸鏡北道沿海にあり、秋季から初冬までの間は、小面積のものとなつて東岸を南下するものであることが窺はれる。今既知漁場と、未開の新漁場との生産力を、漁場の面積と大漁の生起率との相乗積とによつて比較すれば、未開漁場は既知漁場に比し年間に於ける大漁の生起率稍々大にして且つ面積は、二倍してゐるが、結局漁場の生産力に於ては三倍に達するを知るものである。即ち新漁場開發の將來は極めて洋

々たるものあるべしと思はれる。然しながらこれら未開漁場の所在は概ね距離數十哩乃至百哩の沖合にして、現用の漁船は航行能力に乏しいものであるから、本漁業の伸展は漁船の改善によつて達成せらるべき性質のものと思はれる。これら新漁場の漁期は四月乃至十月で、盛漁期と認められる期間は六月乃至八月である。なほ各道別の漁期及び適當なるべしと認めらるゝ漁具投下水深を記せば次の通りである。

道 別	漁 期	適當なるべしと認めらるゝ漁具投下水層、月別平均水深(米)												
		五月	六月	七月	八月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月		
咸鏡北道	自五月至十一月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
咸鏡南道	自六月至十月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
江 原 道	自五月至八月 自十一月至十二月	一三	—	一七	一三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
慶尙北道	自五月至八月	四一	一七	一〇	一一	—	—	—	—	—	—	—	—	—
慶尙南道	自四月至七月	七六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

本漁業用の餌料としては一般に鹽藏マイワシの切身を使用されてゐるのであるが、この地方の漁期中はマイワシの漁獲多きため、その供給は充分である。

第五圖 1

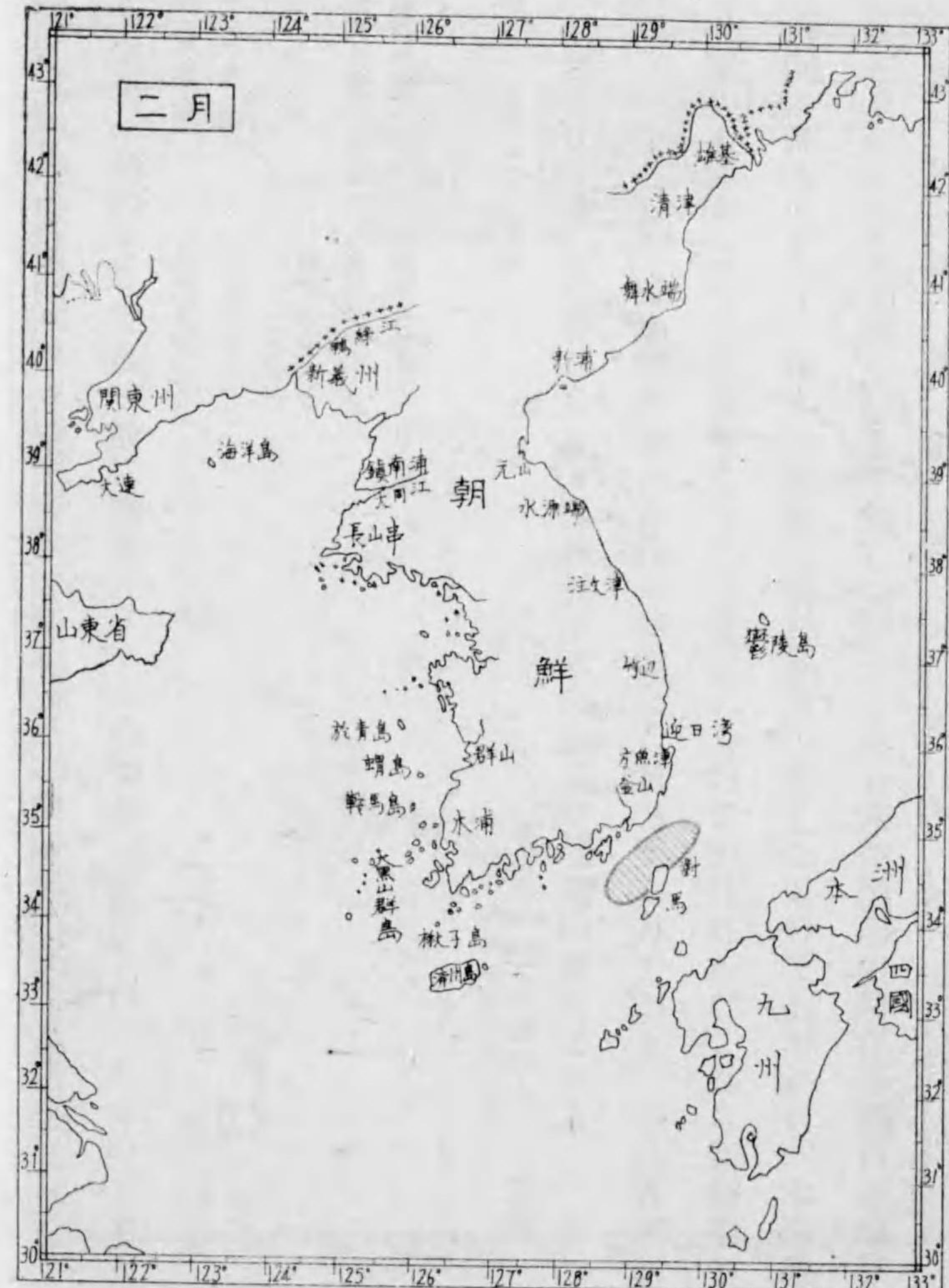


第五圖 3



三三

第五圖 2



三二

第五圖 5



第五圖 4



第五圖 9



第五圖 8





〔附錄〕

一、朝鮮に於けるサバ漁業發展の沿革

朝鮮に於けるサバ漁業は遠き古にありては如何なる状態であつたか不明であるが、李朝時代(皇紀二〇五二年—二五七〇年)に入つてからの模様は断片的ながら文献が見出されてゐるので略々その概要を窺ふことが出来る。即ちこれによれば、この五百餘年間は差したる進歩も示さなかつたらしく、各地一般に行はれた漁法は揮羅網(地曳網の一種)であつて、サバはイワシと共に混獲されてゐたもののやうである。専用の漁具としては東海岸中部以南(江原道—慶尚南道北部)の沿海では底刺網が使用せられ、全羅南道黒山諸島、楸子群島では一本釣(篝火を用ふる夜釣)が行はれてゐた。これら漁獲物は一部分鹽藏して食用されたが、大部分はイワシと共に乾燥されて肥料に供せられた。なほ當時(二百年前)の記録によればサバは四月下旬頃先づ朝鮮南部沖合に現はれ、それより東西二派に分れ、東派は慶尙、江原、咸鏡の諸道に、西派は全羅、黄海、平安の諸道に進み、何れも十月下旬まで滞留して南下するものが見做されてゐた。またその後の観察によればこの東西兩派の群來、状

態は年により消長のあることが知られ、今より約二百年前から百二十年前までは東派より西派が優勢であつたが、百二十年前頃より西派が衰へて東派が優勢になつたと言はれてゐる。李朝時代に於いてサバの回游経路及びその群來の消長がかくまで知られてゐた事は當時この漁業が廣く行はれ且つ相當に人々の關心を有する程度まで發達してゐたことを物語るものであらう。朝鮮古來のサバ漁業はかくして李朝の時代を經過し總督施政の始めに到つたのである。内地人漁業者の韓海に於ける操業は餘程古くから行はれてゐるのであらうが、サバ漁業の創始は近代に屬し、明治十二年鹿兒島縣串木野村の漁船九隻が釜山を根據として操業したのに始まるやうである。この漁業は春から秋までの間、對馬海峽西水道に於いて一本釣(夜釣り)を行つたものであるが、その成績が良かつたため、爾來年々通漁者の數を増し、鹿兒島縣下のもののみならず熊本、島根兩縣下の出漁船もこれに加はつて漸次發展して隆盛に赴いた。而して明治の末に於ける出漁船數は百三十隻に上り、漁獲年額は約三萬圓に達した。日露戰役頃より我が國官民は韓海に於ける本漁業の重要性に着眼し種々の調査、試験を行つたが戰後半島に對する國力の伸張と共に實地の企業は着々として進められた。これに就き官邊の調査は明治三十三年頃より始められた。この調査の中、明治三十八年頃までは

水産業態に關する一般的のものであつたが、サバ漁業に關する實地の試験は明治三十九年農商務省水産講習所が所屬練習船快鷹丸を派遣して帆船を母船とする米國式巾着網を試みたのに始まる。明治四十年頃よりは福岡、長崎、鹿兒島の各水産試験場も夫々試験船を派遣して種々の方法により實地の漁撈試験を行つた。これらの試験は何れも東海岸南半部及び多島海東部の範圍で行はれたものであるが、その結果は政府に於ける韓海開發の政策と相俟つて大いに民間の企業を促進した。

民間の事業としては明治三十八年頃馬山に於ける千葉縣遠洋漁業團が巨濟島南岸に於いて揚繰網を試みたるを旋網漁業經營の嚆矢とする。續いて福岡縣人前田秀吉は石繰網を、太田種次郎は巾着網を夫々同漁場で試用した。この内稍々業績を挙げたものは太田種次郎の巾着網漁業であつた。明治四十二年頃よりはこの成績を聞き傳へ、春季内地より巨濟島南岸に來航操業する各種旋網漁船漸増し、明治四十四年に至つてはその數八〇餘統に達し、早くも漁場の狹隘を告げ船數制限の意見が擡頭した。かゝる状態であつたためその翌年よりは出漁船數は漸減を來し、數年ならずして半減するに至つた。當時使用された旋網の種類は巾着網、縛網、揚繰網の三種であつて出漁者を縣別にすれば長崎、愛媛、山口、廣島、福岡、鹿兒島、香川、鳥取、島根、高知、三重、愛知、千葉の諸縣であつた。

明治四十一年頃、前記巨濟島方面の事業は別に迎日灣方面で巾着網、流網を試みたものがあり、またこの頃方魚津方面では香川縣人合田榮吉が縛網を行つた。迎日灣方面の経過は香ばしからぬものであつたが、方魚津方面の事業は成績良好であつたため明治四十五年よりは從來巨濟島南岸の春漁に従事してゐた旋網漁船が、秋季にはこの地方に回航して操業する事となつた。その後この漁場は北方に向つて擴張せられ大正の初期には慶尙北道沿海に及び出漁期もまた春秋二期に延長された。大正二年には巨文島、青山島方面の漁場が発見せられ、翌三年よりは春漁期中多數漁船の操業を見る事となつた。サバ流網漁業は明治四十四年、香川縣人松岡益太郎が甘浦附近に於いて流網を試みたるをその嚆矢とする。當時大漁であつたため以後これに倣ひ従業するもの漸次増加し、大正の初期までは漁場の擴張は進められ慶尙北道北部より釜山附近に到る沿海に於いて春秋二漁期に操業された。この頃までの操業は表面下十米内外に投網して操業したのであつたが、大正十一年には東海岸南部乃至は對馬海峡西水道の漁場にありては秋、冬の期間、投網水深を増大し、網裾を海底に達せしめて、陸棚底層に棲息するサバを漁獲する方法が考案された。これは恐らく朝鮮在來のサバ底刺網がこの地方に於いて行はれてゐたことに示唆を得たものであらうが、これにより流網漁業の

漁期は延長されて秋季から春季まで繼續して操業されることとなつた。

かくの如く明治末期以來、内地人漁業者の渡航操業による旋網、流網漁業の發展により朝鮮に於けるサバ漁業は急速なる進歩を遂げ、大正の初期には本邦に於ける重要漁業たるの地位に到達した。然しながら旋網、流網漁業の發展に引き替へ、明治の初期以來行はれた内地式一本釣漁業はこの間漸次凋落の運命を辿り大正の初めに到つて遂にその姿を没した。

大正中期までのこれら内地式サバ漁業は總べて手漕、帆走の和船で營まれたものであるが、恰も當時は我が國漁業界に於ける發動機船の利用勃興の初期に當つてゐたため、朝鮮のサバ漁業も亦この線に沿ふて進むの氣運を醸成せられ多くの人々によつて漁撈方法の動力化を試みられることとなつた。

この試みは大正の末に到り技術的に成功の域に達し、昭和の初期には一般に普及して本漁業の飛躍的發展を示した。而して動力化の結果、流網は別段著しき漁法の變化を見なかつたが、旋網類に屬するものにおいては從來の縛網、揚繰網は廢れ、片手廻し巾着網、兩手廻し巾着網の二種のみが盛んに行はれる事となつた。

以下少しく本漁業の動力化完成の経過を述べ功勞者諸氏の事績を明らかにする事としよう。

片手廻し巾着網漁法の試みは當時米國加州沿海で行はれてゐた動力式巾着網漁法を朝鮮の實狀に適合するやうに改められたものであつて、最初の事業は米國在留者寺西某により大正七年春、朝鮮丸を使用して行はれた。次いで山口縣水産試験場は同年秋試験船仙鶴丸(擔當者、本田光吉、竹田重雄、上野省三)を以つて事業を開始し、翌八年には下關市進漁組は進漁丸(擔當者岩本千代馬)、大正九年には株式會社日鮮組(擔當者三輪源造)、及び林兼商店(擔當者大庭雅弘)も事業に着手し夫々實地の漁撈に従事しつゝ工夫改良を進めた。

これらの事業は何れも南鮮漁場で行はれ使用船舶は専用の目的を以つて夫々設計新造されたものである。而してその主機關の動力は單に船體推進の用に供せらるゝのみならず傳導軸の媒介によりウキンチを駆動し、漁具の捲揚に利用せらるゝものであつた。近來揚網機(ネット、ホーラー)をウキンチ併用するものが増加したが、これは昭和の初期三輪源造の工風、考案になるものである。なほ本漁法創始當時試用された漁船の内、船體要目明らかなるのを掲ぐれば次の通りである。

仙鶴丸	和船型、木造、二〇噸、五〇馬力	山口縣水産試験場
進漁丸	西洋型、木造、三〇噸、五〇馬力	進漁組
第一魚青丸	西洋型、木造、三八噸、八〇馬力	林兼商店
第二魚青丸	西洋型、木造、二五噸、四〇馬力	同
第三魚青丸	西洋型、木造、二八噸、五〇馬力	同

動力附漁船による兩手廻し巾着網漁法は、和船式旋網の漁法から轉化されたものである。大正の初期以來和船式の旋網にありては、その網船を漁獲物運搬用發動機船に曳航させて操業してゐた處、この法式による業者は大正中期に至り前記片手廻し動力漁法の試みらるゝを見て、其作業が迅速にして効果的なるに刺戟せられ、從來の和船式巾着網の網船二隻に發動機を据付けて船體を推進し且つ動力ウキンチを裝置して動力化を行つたものである。その創始者が何人であつたかを詳かにしないが、最初の試みは長崎縣地方の漁業者によつてなされたやうである。この漁法は、從來の旋網よりの轉換比較的容易なるため忽ちにして一般に普及し大多數の漁業者はこの方法を採用するに到つた。流網漁業を動力附漁船で行ふの試みは大正元年頃、山口縣在籍汽船、防長丸(九〇噸、鋼製汽船)の事業を以つてその濫觴とする。この事業は總ての様式を英國式に則り、東海岸南部で作業を行つ

た。然し収益不充分なため間もなく中止された。その後暫くの間この試みは絶へてゐたが、大正十二年に到り慶尚北道水産試験場は當時盛んに赴いてゐた帆船サバ流網漁業の能率の増進を圖るため、所屬試験船迎日丸二〇噸、四〇馬力、木造發動機船。擔當者、森下伊三郎、杉谷俊夫)を使用して九龍浦近海で動力式流網漁法の實地の試験を行つた。その結果極めて有利なることを確かめ、これを業界に紹介した。然るに同年秋には早くも九龍浦在住漁業者萱野田太郎は從來の流網漁船に發動機を据付けて操業したところ、その成績頗る良好であつたため、翌大正十三年よりは、これに倣ふもの續出し數年ならずして南鮮一帯に普及した。この漁法も主機關の動力は船體推進の用に供せらるゝのみならず、ウキンチを驅動をして漁具の捲揚に利用されるものであつたから、動力化の曉は作業、航行の能力を増大して漁期、漁場の延長、擴大に資し大いに漁獲を増進して本漁業の進展に貢献した。

かくして大正の末期までに完成された動力漁法は昭和の初期に到り一般に普及し、巾着網流網は動力附漁船により南鮮漁場に於いて營まるゝこととなつた。然しながらもの極まれば悲哀多く、これら漁業の操業能力の増加はその初期にありては大漁の喜びを満喫したるも、聽て漁場に於ける漁

獲競争の激化となり、ために作業上の紛争頻發して漁獲意に任せず、一方優秀漁船建造の競争等を誘發して漁業經營費の増高を來し、業者の經濟は亂脈に陥り堅實なる營業を繼續し難き状態となつた。この苦境を脱するため昭和五、六年頃より業界には新漁場開發の試みが行はれることとなり、流網業者中には遠く堪察加に渡つて鮭鱒漁業に従事するものあり、或は黃海北部乃至は山東省方面に出漁してサワラ漁業に従事したるものあり、近くは裏日本沿海或は咸鏡北道、江原道方面のサバ漁場を探り、多島海乃至は於青島沿海に於けるアヂ、サバ漁場を探るものがあつた。また巾着網業者中にも江原道、裏日本のサバ漁場への進出を試み多島海西部乃至は西岸南部に於けるアヂ漁場を探るものがあつた。

本場は豫てこの間の事情を察し昭和四年以來黃海全般に亙るアヂ、サバ新漁場の探査を行つたのであるが、昭和九年六、七月それまでの調査の成績に基づき南鮮在住の流網漁業者の漁船多數をこの方面に誘導して操業せしめ、多大の収益を擧げて西岸南半部及び多島海西部に於けるアヂ流網新漁場の開發に成功した。

漁法動力化以來の漁場の擴張はかくの如くして進められ、現在に於いては流網にありては周年、

巾着網にありては六月より十二月までを漁期として、江原道北部より多島海を経て西岸南半部に到る延長六百海里の沿海を漁場としてアヂ、サバの漁獲に従事し差し當り漁場狹隘の問題は解決された。而して支那事變勃發以來は漁業用物資の配給意に任せざる場合あるも業績概して良好にして、業者は職域奉公以つて堅實なる營業を續けてゐる。なほ昭和の初期、本漁業の競争激化するや、巾着網業者にありては特にこれによつて受くる打撃が甚大であつたため、爾來同業者相諮つて團體を組織し、魚群發見順位による投網の掟を定め、使用漁船の主機關の馬力を制限して漁撈作業上の秩序の維持に努めてゐるが、昭和十一年に到りてこれを法定の團體に改め、その名稱を朝鮮鯖巾着網漁業水産組合とし、從來實施した事業の外、組合員所要物資の共同購入、出漁開始期日の制定、飛行機による魚群探見等の業務を行つて組合員共同の利益の増進を圖り、本漁業の堅實なる發展に顯著なる成績を擧げてゐる。

以上巾着網、流網漁業の外、新興のサバ漁業として擧ぐべきものは東海岸地方に於いて行なはる、サバ延繩漁業である。この漁法も内地式のものであつて明治の末期以來多くの試みにより、この地方に傳へられ、近年に到つて急激なる發展を見たものである。今この發展の經過を地方別に述べれば次の通りである。

ば次の通りである。

本漁業が最も早く試みられたのは咸鏡北道地方であつて、明治四十年長崎縣人山下某が鏡城灣内にて試漁したるをその嚆矢とする。咸鏡南道にありては大正九年汝海津在住岡田某が龍臺里に於いて試み、江原道にありては大正十一年高城郡在勤水産技手の實地指導が燦遂里で行はれたのを最初とするやうである。これらの試みは何れも試用地附近の鮮人漁業者に本漁法を傳へたるにきゞまり、その後昭和の初期までは漁業の採算よろしからざりしため別段の發展を見ずして経過した。然るに昭和四、五年頃に到り咸鏡線の全通、その他この地方に於ける交通、運輸の便開けて陸上諸産業の發展を見たるにより漁獲物の需用を増し、魚價の昂騰を來したるため、漁業の収益良好に赴き業者激増して急速なる發展を遂げた。特に昭和八年、滿洲國の獨立に伴ふ東部滿洲、乃至は北鮮國境方面の産業交通の發展は東海岸北部地方に於ける本漁業の飛躍的進展を齎らした。

慶尙北道以南に於ける本漁業發展の経路は稍々これに趣を異にし、この地方にありては魚價は以前より相當の高値を維持してゐたため、本漁法が試みられて収益良好なる模範を示さるゝや忽ちにして一般に普及して盛況に達した。この地方に於ける最初の試みは大正十五年鬱陵島廳(擔當者岩崎技

手)の指導により同島沿岸に於いて本漁業を試みたところ、成績良好であつたため直ちに島民間に傳はり重要な生業となつた。次いで昭和七年慶尙北道水産試験場は迎日郡沿海で漁業試験を實施したるに本漁業成立の見込を得たるにより、翌昭和八年慶尙北道廳はこの結果に基づき、迎日郡管内の漁業組合を提携して、同郡沿海に於いて實地指導を試みたところ、これまた成績よく直ちに道内全般に普及し遂に今日の隆運を見ることとなつた。慶尙南道に於ける本漁法は昭和四年慶尙北道方面から傳へられたものと言はれてゐるが、その後同道水産試験場の努力により本漁業の進展が進められ近時従業船数の増加を見るに至つた。

東海岸地方に於ける本漁業はかくの如き経過により現在の盛況に到達したものであるが、既に述べたるが如くその發達の経路は南北事情を異にするため稍々その業態を異にし、中部以北にありては發動機船を用ふるもの未だ少く大多数のものは朝鮮型帆船を用ひて漁業を営み、その漁獲物は鹽臍品として處理されてゐるが、南部地方にありては大部分發動機船を使用して漁業を営み、漁獲物は鮮魚として販賣されてゐる。

昭和四年以來本場の實地漁撈試験の結果によれば多島海中部以西、西海岸方面のサバは延繩では

漁獲し難く、この地方には本漁業發展の見込がないやうに思はれる。

なほ東海岸地方に於ける本漁業進展のためには官邊に於ける多くの試験調査、奨励事業が行なはれた。これを列挙すれば附録二の(ハ)の通りである。

二、朝鮮近海で行なはれた諸官署のサバ漁業試験、調査、奨励事業

朝鮮近海ではサバ漁業の進展を圖るため明治の末期以來、諸官署によつて多くの試験、調査、奨励事業が行なはれた。その主なるものを列挙すれば次の表の通りである。

(イ)巾着網漁業に関するもの

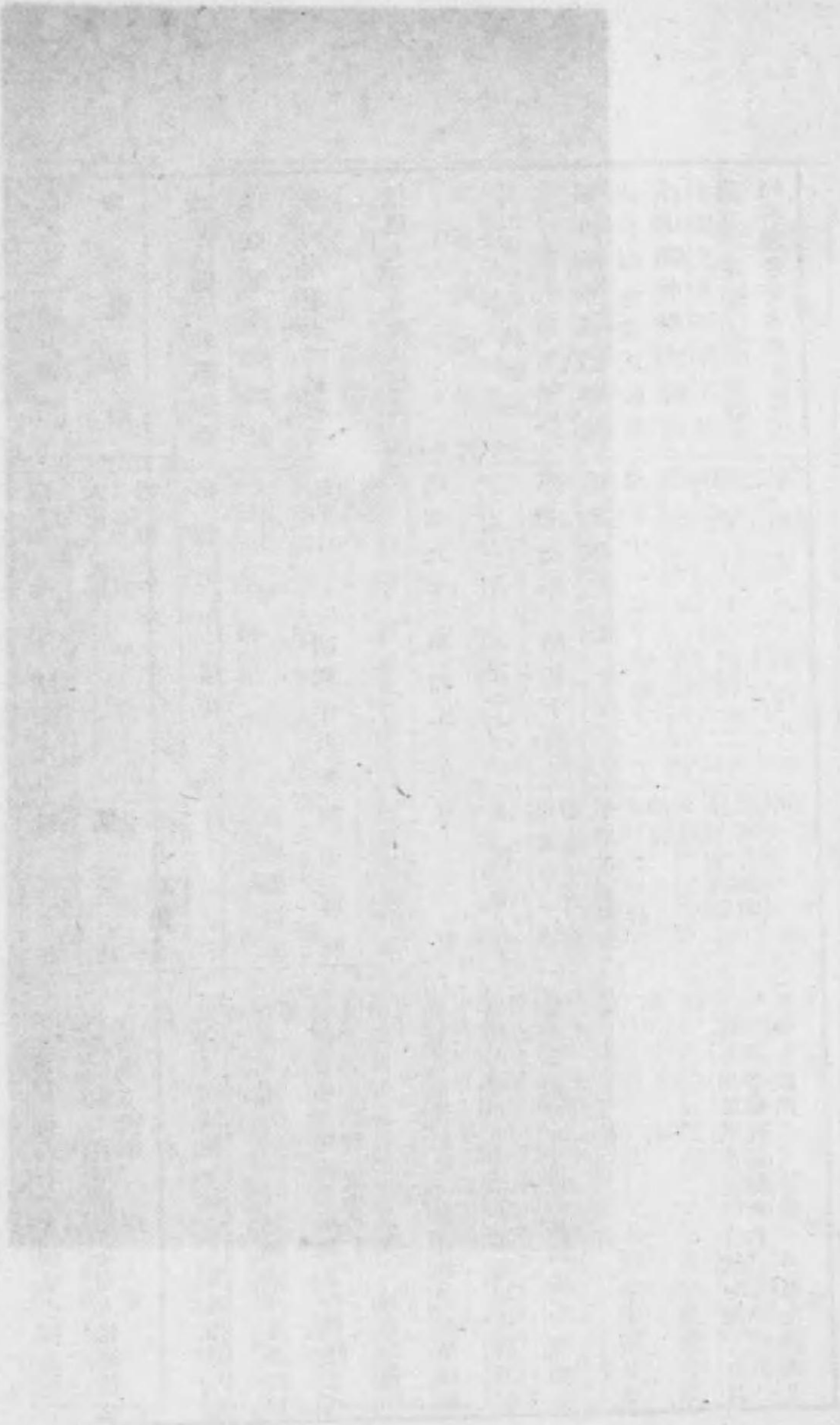
實 施 者	實 施 年 次	場 所	經 過 概 要
山口縣水産試験場	大正七年 大正十二年	南 鮮 沿 海	○動力附漁船による操業法完成のため及び新漁場探査のため本試験を行つた。
農商務省水産講習所	明治三十九年	南 鮮 沿 海	○帆船を母船とする米國式巾着網を試みた。
關東水産試験場	明治四十四年 大正二年	黃 海 北 部	○海洋島近海で和船式巾着網を試みた。

(ロ)流網漁業に関するもの

實 施 者	實 施 年 次	場 所	經 過 概 要
關東水産試験場	明治四十年—明治四十二年 大正七年—大正九年 昭和六年—昭和十年	關東半島南岸 及び山東半島 北岸の東部	○サバの同游経路調査及び漁業振興のため流網を試用した。
黄海道水産調査所	大正九年—大正十年	黄海道沿岸	○サバ流網を試用して本漁業經濟の成否を調査した。
黄海道水産試験場	大正十一年—昭和三年	黄海道沿岸	○サバ流網を試用して本漁業經濟の成否を調査した。
慶尙北道水産試験場	大正十二年	慶尙北道	○動力附漁船による漁法創始のため流網漁業試験を行った。
全羅北道廳及同道水産試験場	大正十二年—昭和十年	於青島沿海	○サバ流網漁業經濟の成否を試み、企業者の事業を補助獎勵して西海岸地方に於ける本漁業を創始した。
朝鮮總督府水産試験場	昭和四年—昭和十五年	黄海東半部及 多島海西部	○流網を試用して漁場の性状を探ぐり新漁場の發見に努めた。昭和九年には業者に対する實地指導をなし西岸南半部新漁場の利用、開發に成功した。
全羅南道水産試験場	昭和六年—昭和九年	多島海	○サバ流網漁業の經濟を試験した。
忠清南道水産試験場	昭和八年—昭和十年	忠清南道沿海	○サバ流網漁業の經濟を試験した。

(ハ)延繩漁業に關するもの

實 施 者	實 施 年 次	場 所	經 過 概 要
慶尙北道廳	昭和七年—昭和九年 大正十五年 昭和八年	鬱陵島 迎日郡沿海	○母船式延繩を行つて漁場の探査をした。 ○漁民に對し實地指導をなし延繩漁業を普及させた。 ○同 右
慶尙北道水産試験場	昭和七年—昭和八年	同 右	○延繩漁業試験を行つて實地指導の基礎を定めた。
江原道高城郡廳	大正十一年	高城郡沿海	○實地指導を行つて延繩漁法を漁民に傳へた。
慶尙南道水産試験場	昭和十一年—昭和十六年	對馬海峡	○延繩漁場を探査し漁業者を指導して本漁業の振興に努めた。
咸鏡北道水産試験場	大正十二年—大正十三年 昭和九年—昭和十年	咸鏡北道沿海	○漁業傳習を行つて漁民に漁法を傳へた。 ○母船式漁法により沖合新漁場を探査した。
鳥取縣水産試験場	大正十二年—大正十三年 昭和七年—昭和十四年	北 鮮 沿 海	○延繩を使用して沖合新漁場を探査に努めた。
福井縣水産試験場	昭和四年	東海岸一帯 沿海州南部	○延繩を用ひて沖合新漁場を探査した。
山形縣水産試験場	昭和十一年—昭和十二年	咸鏡北道沿海 北 鮮 及 沿 海 州	○同 右
石川縣水産試験場	昭和八年—昭和十一年	同 右	○同 右
本場及東海岸各道 (咸北、慶南)水産試験場	昭和十年—昭和十二年	日本海西半部 及對馬海峡	○延繩を用ひて漁場の性状を探ぐり且つ新漁場發見に努めた。
朝鮮總督府水産試験場	昭和五年—昭和八年	黄 海	○延繩を使用して漁獲の多寡を調査した。



製本控

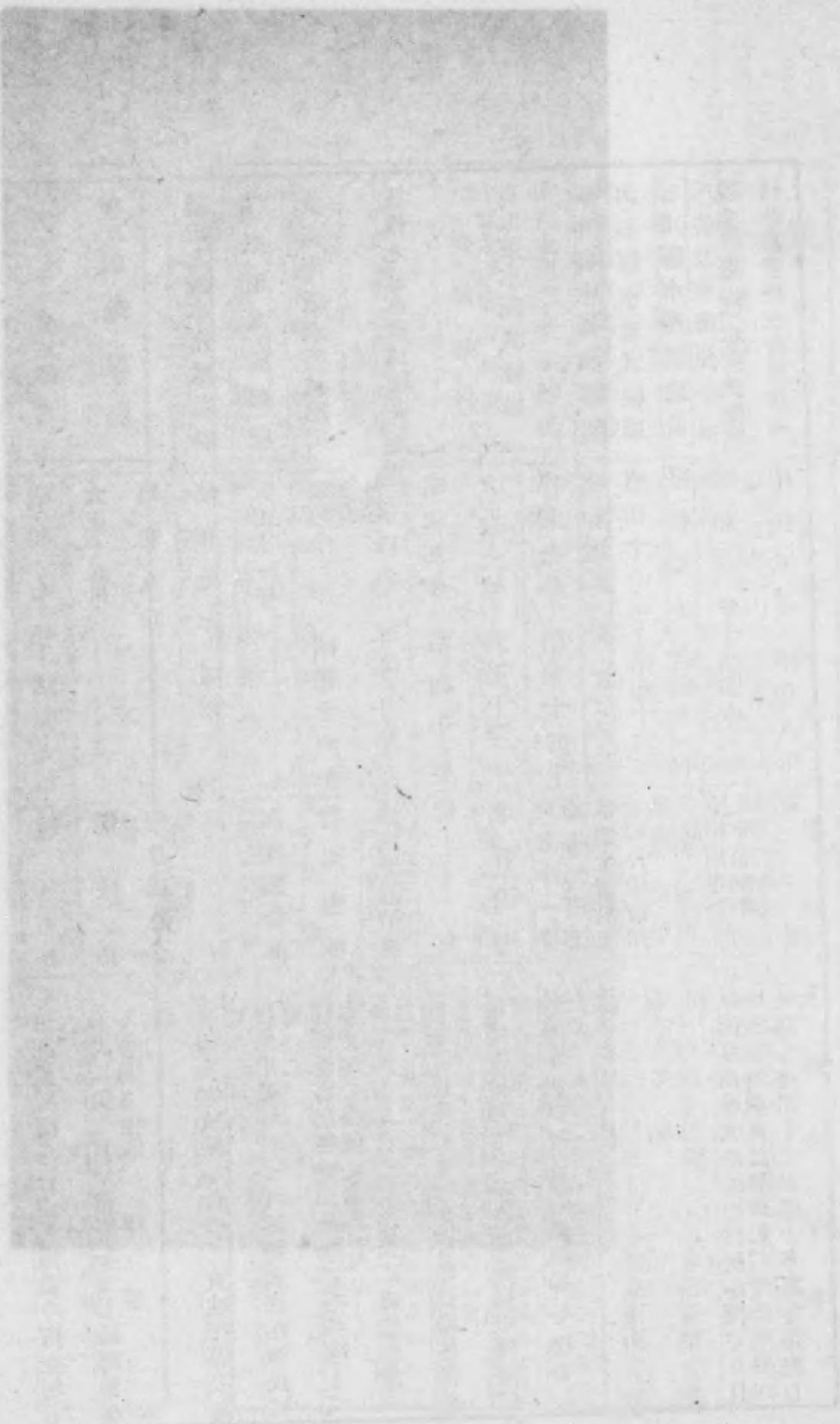
917	120	917	120	年	月	日
朝鮮近海に於けるカハ、漁場の 性状						
備考						
冊						

917
120

917
120

朝鮮總督府水産試験場
釜山牧ノ島

昭和十六年十月一日印刷
昭和十六年十月五日發行
(10000部)
釜山牧ノ島
朝鮮總督府水産試験場
東京市本郷區駒込林町一七二
印刷所 杏林舎



917
120

パンフレット

- 一、朝鮮近海の地形海況と水産生物概観 郵税三錢
- 二、朝鮮のメンタイ漁業に就て 同
- 三、朝鮮産マイワシの特性(特に罐詰原料として)に就て 同
- 四、朝鮮産マイワシを原料とする「フィッシュミール」の性状に就て 同
- 五、朝鮮の水産と水産教育 (絶版)
- 六、朝鮮沿岸のニシンの生態及蕃殖保護に就て 郵税三錢
- 七、鴨綠江の魚 同
- 八、朝鮮近海におけるサバ漁場の性状 同

終